



紙は神様

北原照久

僕はテレビの「開運！なんでも鑑定団」の影響からか、「ブリキのおもちゃ専門」というイメージが強いのだが、実のところはブリキより紙のほうが長い付き合いなのだ。ブリキは二十五歳からだが、紙は学生時代から集めている。

紙……我々雑物コレクターは「紙物」と呼んでいる。ポスター、広告チラシ、ラベル、パッケージ、商品宣伝用POP、雑誌、マンガ、その付録の紙オモチャなどであり、「コレクションの対象は驚くほど多岐にわたっている。だから紙物は、コレクターの目から見ると、まさに宝の山なのである。

僕と紙とのつき合いは、幼い頃に観た映画のポスター収集から始まった。そして、マッチのラベル、広告チラシ、パッケージ、雑誌などに及び、現在ポスターだけで二万枚以上、マッチのラベルは二十万枚

以上ある。それだけの量だから管理も大変。特に紙は、光、温度、湿度の影響を受けやすいので、四百坪の専用倉庫でしっかりと空調管理をして保存している。そうやって大切にしていれば、現代の紙は千年でも二千年でも残すことが可能だ。

紙物の魅力は、作られた時代を感じさせること。もちろん絵柄などが、その時代の雰囲気を映し出している懐かしさもあるが、実はそれと同時に紙自体が時代の空気を吸って、独特の雰囲気を醸し出していることが魅力なのである。素材自体が呼吸しており、時代の空気を吸っている。それがポスターなどに微妙な色合いや質感を与え、実に味わい深い雰囲気となるのだ。まるで生き物のようだ。これぞ、紙の持つ魅力と書いていいだろう。

今、僕が興味を持っているのは、戦後に発行されたカストリ雑誌。三号でつぶれるから、カストリ雑誌と呼ばれたもの。三合飲んでだけで誰でも酔いつぶれるカストリ酒からの洒落である。三号でつぶれると言われただけあり、とても種類が多い。そして、どれも内容にすごくパワーが感じられる。まさにこれが、日本の戦後復興の源なのだろうと思わせてくれるところに着かれる。何も無い焼



北原照久(きたはら・てるひさ) 1948年東京都出身。世界的に知られるティントイ(ブリキのおもちゃ)コレクションの第一人者。横浜ブリキのおもちゃ博物館を始め、6つの博物館の館長を務めている。『開運！なんでも鑑定団』などのテレビ番組でも活躍中。

け野原から、今の日本を作ってきた我々の先輩たちの「頑張ってるぞー!」という声がこれらの雑誌からは聞こえてくる。それは、現代の日本が失ってしまった大切なもののひとつである。

そんな元気を感じさせてくれるから、戦後という時代の博物館を作りたかと思っている。そしてさらに六〇年代、七〇年代と、それぞれの時代を切り取った博物館も是非作りたい。

「コレクションは集めるだけでなく、やはり人に見せて喜んでいただけてこそ、価値があるものだと思う。だから、現在六館あるおもちゃ博物館だが、これからもうひとつ増やしていくだろう。

僕のコレクションは、映画のポスターという紙から始まり、一九八五年に雑誌という紙媒体で紹介されてから、拳に目の目を見た。自分の人生は、ある意味では紙によって成功へと導かれたようなものだと感じている。

僕には、紙の神様がいるのかもしれない。それ故に紙とのつき合いは、まだまだこれから続きます。

PAPER COLUMN Vol.10

水に溶けるメリット 溶けないメリット

ティッシュペーパーもトイレtpペーパーも両方とも薄くて柔らかい紙です。その違いは、トイレtpペーパーは水に溶けやすく、ティッシュペーパーは水に強く、溶けにくいことです。トイレtpペーパーは、水に流したときにすぐに溶けなくては困ります。

紙は、繊維がからみ合っていて、ティッシュペーパーは、水を含んでもほぐれずに強さを保つように、耐湿樹脂を加え、繊維の長い針葉樹を多く使っています。

他方、トイレtpペーパーは、そうした樹脂

は加えずに、針葉樹よりも繊維が短い広葉樹の割合を多くして、水にほぐれやすくしてあります。



今回は3月4日号、南伸坊さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo: Yohei Maruyama